

平成21年 3月31日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19592435
 研究課題名（和文） 看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度・教育プログラムの開発
 研究課題名（英文） The development of the gradual scale for the skill of nursing student's communication and their educational program
 研究代表者
 上野 栄一（UENO EIICHI）
 福井大学・医学部・教授
 研究者番号：60262507

研究成果の概要：本研究では看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度・教育プログラムの開発を行った。最終的に9つの因子，42項目からなる尺度が開発された。授業プログラムでは，ロールプレイが最も効果の高い事が検証された。本研究結果から【人間尊重，【積極的傾聴】【音響学的配慮】【言語化】【係わり】【観察】【フォーカシング】【アサーション】【感情コントロール】を中心に学ぶことのできる授業プログラムが開発された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：コミュニケーション，尺度，対人関係，評価

1. 研究開始当初の背景

(1) コミュニケーション技術は，看護を展開する上でなくてはならない技術であり，看護実践能力のコアとなるものである。筆者らはこれまでコミュニケーションの主観的評価と客観的評価について，看護師を対象に，治療的技法（沈黙，受容，認知，献自，開示，一般的リード，順序立て，観察，表現の促し，比較の促し，反復，反射，焦点化，探索，情報提供，明確化，現実提示，疑念の表明，合意による確認，言語化，評価の促し，感情理解の試み，協同の提言，要約化，行動計画の促し）及び非治療的技法（保証，是非，拒否，否認，同意，不同意，忠告，審問，挑戦，試し，防衛，説明の要求，外因の指摘，感情の軽視，紋切型の言い方，文字通りの応答，否定，解釈，無関係な話題の導入）を用いた場合の感情の度合い（快—不快感）の測定について解析してきた。その結果，非治療的

技法を実習の場で多く用いていることが明らかとなった。

最近，看護学生のコミュニケーション能力が，臨床の場で問題視されてきている。たとえば，臨床実習では，「患者とうまくコミュニケーションがとれない。」「挨拶ができない」，「自分を表現できない」，「敬語を用いることができない」などである。本研究結果は，これらのことを示唆するものであった。コミュニケーションに関する研究は心理学領域で多くの研究がなされており，アーガイル（1988）は非言語的コミュニケーションの視線をテーマに研究をしている。これまでの多くの研究は言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションについて研究されてきている。看護の領域でもコミュニケーションに関する研究は多く，その中でも多くの事例研究の中で，患者のコミュニケーションに関するものが多数研究され

ている。

看護は対人関係の中でケアが展開され、トラベルビー、ペプロウ、オーランドなど多くの看護理論家も人間関係の重要性を説いている。

特に、臨床の場では、コミュニケーションは、看護管理の視点から患者の満足度にも影響し、さらには看護サービスの観点からも無形のサービスとして注目されてきている。したがって、このコミュニケーション能力を向上させることは病院のサービスに大きなポジティブな影響を与えると考える。これまで、筆者は看護師のコミュニケーション能力に関する尺度の開発をしてきた(日本看護科学学会誌, 2005)。この研究では、看護師のコミュニケーション能力として5つの因子(第1因子「情報収集」、第2因子「話のスムーズさ」、第3因子「積極的傾聴」、第4因子「パーソナルスペース・視線交差」、第5因子「アサーション」)の5つの因子が抽出された。本研究での対象は、看護師であるが、看護学生への評価も可能と考え、現在看護学生を対象とした研究も進めているところである。信頼性・妥当性の検討では、全体でのCronbachの α 係数は0.874と内的整合性の高い値を示し、本尺度が信頼性の高いものであることが検証された。また、併存妥当性の検討では、本尺度とKiSS-18との間には、高い有意な相関を示し、妥当性の高い尺度であることが証明された。現在、本尺度は多くの臨床の場で使われてきている。本尺度は看護師を対象としたものではある。これをもとにして、学生版を開発して、看護学生のコミュニケーション能力を学年別に段階的に客観的に評価する予定である。そして、コミュニケーション能力が学年によってどう違いがあり、どのように形成されていくのかについてプログラムを開発して教育に生かすことで、今後のコミュニケーション能力を伸ばすための重要なツールとなることが期待される。

2. 研究の目的

(1) 研究目的は以下の通りであり、以下の4つの項目について明らかにする。

①看護学生の段階的コミュニケーション能力測定尺度の開発

看護学生のコミュニケーション能力を段階的に測定できるツール(尺度)を開発するにあたっては、次の手順により実施した。

②各学年のコミュニケーション能力測定
看護大学生1学年～4学年までのそれぞれの学年でのコミュニケーション能力を開発した尺度によって測定する。

③コミュニケーション能力評価に基づく教育プログラムの開発

上記に示したコミュニケーション能力の測定指標を基に、コミュニケーション能力の低い項目についての学習プログラムを開発する。ビデオ学習、講義形式、小グループ(対面式)による講義形式などについて、学習プログラム

を作成する。

④教育プログラムの実施と評価

看護学生に段階別(各学年毎)に教育プログラムを実施し、評価する。評価としては、看護学生の段階的コミュニケーション能力測定尺度に基づく授業理解度評価尺度を作成し、授業の理解度を評価した。

3. 研究の方法

(1) 対象者

1道3県5つの総合病院に勤務する看護師850名に対し、平成19年10月～平成20年3月にかけて、アンケート調査を実施(留置法、郵送法)し、看護学生に必要なコミュニケーション能力についての自由記載部分について、WordMinerソフトを用いて尺度開発のための項目を抽出した。さらに文献に依拠したコミュニケーション能力の項目を抽出し、尺度開発のための項目を抽出した。

分析ソフトにはSPSS16.0及びWordMinerを用いた。

並存妥当性の検討には、上野の看護学のコミュニケーション能力測定尺度を用いた(2003)。本尺度は19項目5因子からなる。

(2) 研究方法

第1段階：帰納法的手法、演繹的手法による質問紙原案の作成

第2段階：質問紙原案による調査および新尺度の開発

第3段階：教育プログラムの評価

(3) 倫理的配慮

倫理的配慮としては、対象者の匿名性の確保、データの保管方法、参加の自由等について説明し実施した。また、本研究の実施にあたっては、本学医学部倫理審査委員会の承認(第192号)を得た。さらに対象施設の承認を得た。スーパーバイザーとして、尺度開発の専門家3名に入ってもらった。

(4) 尺度開発の手順

看護学生のコミュニケーション能力測定尺度の開発を行う。

①アイテム・プール(質問項目集積)の帰納法的抽出

看護学生に必要なコミュニケーションについて自由記載のアンケートを用いて、帰納法的に質問項目を抽出する。

②アイテム・プール(質問項目集積)の演繹法的抽出

看護学生に必要なコミュニケーションについてコミュニケーションに関する文献を用いて、演繹法的に質問項目を抽出する。

③概念枠組みを作成後、質問紙を作成する。

④内容妥当性について検討する。

⑤表面妥当性について検証する。

⑥質問紙原案による調査実施(看護学生約300名に実施)。

⑦コミュニケーション能力測定尺度の完成 統計処理は、SPSS16.0Jを用い、因子分析、

項目分析，並存妥当性の検討，G-P分析， α 係数の算出。

(5) 看護学生のコミュニケーション能力測定尺度を用いて，第1学年から第4学年までのコミュニケーション能力を評価する。評価をする一方で，本評価をもとにして，教育プログラムを作成する。

①各学年（第1学年，第2学年，第3学年，第4学年）のコミュニケーション能力の評価（開発した尺度の使用）

②各学年（第1学年，第2学年，第3学年，第4学年）のコミュニケーション能力の教育プログラムの開発

(6)各学年（第1学年，第2学年，第3学年，第4学年）のコミュニケーション能力開発プログラムの実施と評価

方法：介入群とコントロール群に分けてコミュニケーションの能力を統計学的検定にて評価する。方法は，各学年を介入群（30名）とコントロール群（30名）に半分ずつ分けて実施する。介入方法は，講義形式を中心に実施する。

(7)授業評価の実施

授業評価の実施は，開発した尺度の項目の理解度について評価した。項目は開発した尺度と同一とした。統計処理により，1学年，2学年，3学年，4学年のコミュニケーション能力の評価を実施する。研究実施にあたっては，本学の医学部倫理審査委員会の承認を得た。

4. 研究成果

(1)質問紙原案は，帰納法的手法及び演繹的手法により178項目を作成した。

(2)表面妥当性，内容妥当性，相関係数の検証，G-P分析，尖度・歪度の検証の結果，9因子よりなる42項目からなる尺度を開発した（表1-1・表1-2）。

因子分析は，主因子法，プロマックス回転（斜交回転）で実施した。因子分析の結果，第9因子まで抽出できた（表1-1，表1-2）。

質問紙原案では，178項目あり，下位概念は，「アサーション」，「セルフコントロール」，「パーソナルスペース」，「共感」，「場の雰囲気」，「情報収集」，「身だしなみ・礼儀」，「身体動作」，「人間尊重」，「幅広い知識」，「問題解決」，「音響学的」，「社会性」，「配慮」，「報告」の15の概念が抽出された。

これらは，因子分析によって，最終的に第1因子【積極的傾聴】，第2因子【アサーション】，第3因子【音響学的配慮】，第4因子【係わり】，第5因子【人間尊重】，第6因子【観察】，第7因子【感情コントロール】，第8因子【フォーカシング】，第9因子【言語化】の9つの因子が抽出され，高い信頼性と妥当性を有していた。

累積寄与率は，第1因子：29.82，第2因子：35.46，第3因子：39.79，第4因子：43.67，第5因子：47.07，第6因子：50.21，第7因子：53.26，第8因子：56.01，第9因子：58.62

であった。

(3)抽出された因子の特徴

①第1因子【積極的傾聴】には，次の12項目がある。

「相手の意見を認める。」（因子負荷量0.628；以下数値のみ表示），「雰囲気を大事にする。」（0.595），「表情を読み取る。」（0.557），「辛抱できる。」（0.552），「人間性を重視する。」（0.494），「相手の話に巻き込まれない。」（-0.485），「支援できる。」（0.477），「同調する。」（0.477），「相手の意見を受け止める。」（0.454），「体験を大切に。」（0.409），「感情を共有する。」（0.371），「安心感を与えることができる。」（0.361）

②第2因子【アサーション】には，次の6項目がある。「意思表示できる。」（0.736），「相手に自分の意志を伝える。」（0.656），「話題を提供する。」（0.578），「萎縮しない。」（0.547），「話題が豊富である。」（0.491），「スキンシップをとる。」（0.383）

③第3因子【音響学的配慮】には次の5項目がある。

「声の大きさに留意する。」（0.709），「声のトーンに留意する。」（0.657），「話すスピードに留意する。」（0.590），「姿勢に留意する。」（0.474），「話すリズムに留意する。」（0.398），

④第4因子【係わり】には次の5項目がある。「負担をかけない。」（0.659），「返答しやすい問いかけをする。」（0.636），「さりげない言葉がけができる。」（0.575），「多角的にとらえる。」（0.377），「客観的に評価する。」（0.294）

⑤第5因子【人間尊重】には次の3項目がある。

「マナーを知っている。」（0.648），「高齢者への対応ができる。」（0.557），「敬意を払う。」（0.479）

⑥第6因子【観察】には，次の3項目がある。「洞察力を持つ。」（0.752），「観察力がある。」（0.619），「教養を持つ。」（0.325）

⑦第7因子【感情コントロール】には次の3項目がある。

「不安を表出しない。」（0.674），「不快感を与えない。」（0.599），「気分のむらをなくす。」（0.486）

⑧第8因子【フォーカシング】には次の2項目がある。

「会話に集中する。」（0.613），「話題を選ぶ。」（0.382）

⑨第9因子【言語化】には，次の2項目がある。

「相手の気持ちを言語化する。」（0.505），「五感を使って話す。」（0.309）

表 1-1 因子分析結果

(主因子法, プロマックス法)

項目 No	質問項目	1	2	3	4
1	相手の意見を認める。	0.628	-0.003	0.028	-0.001
2	雰囲気的大事とする。	0.595	0.118	0.031	-0.144
3	表情を読み取る。	0.557	-0.014	-0.107	0.131
4	辛抱できる。	0.552	-0.141	-0.006	0.154
5	人間性を重視する。	0.494	-0.065	0.082	-0.100
6	相手の話を巻き込みたい。	-0.485	0.451	0.032	0.232
7	支援できる。	0.477	0.290	-0.075	0.289
8	同調する。	0.477	-0.099	0.008	0.109
9	相手の意見を受止める。	0.454	-0.084	0.213	0.067
10	体験を大切にする。	0.409	0.125	-0.034	-0.239
11	感情を共有する。	0.371	-0.053	-0.030	0.229
12	安心感を与えることができる。	0.361	0.031	-0.003	-0.003
13	意思表示できる。	0.128	0.736	0.261	-0.130
14	相手に自分の意志を伝える。	0.208	0.656	-0.093	0.000
15	課題を提供する。	-0.070	0.578	-0.065	0.127
16	萎縮しない。	-0.001	0.547	0.039	0.096
17	課題が豊富である。	-0.251	0.491	-0.107	0.010
18	スキンシップをとる。	0.165	0.383	-0.042	-0.043
19	声の大きさに留意する。	0.025	0.052	0.709	0.086
20	声のトーンに留意する。	0.015	0.035	0.657	0.024
21	話のスピードに留意する。	0.129	-0.084	0.590	0.018
22	姿勢に留意する。	-0.123	-0.038	0.474	0.072
23	話のリズムに留意する。	0.087	0.057	0.398	-0.106
24	負担をかけない。	0.178	-0.072	-0.005	0.659
25	返答や質問をかける。	-0.120	0.072	0.130	0.636
26	さりげない言葉かけができる。	0.008	0.147	-0.026	0.575
27	多角的にとらえる。	0.164	0.192	0.032	0.377
28	客観的に評価する。	0.072	-0.037	0.114	0.294
29	目上の目線に話しかけられる。	-0.053	-0.023	0.012	0.023
30	マナーを知っている。	-0.085	-0.085	-0.052	-0.007
31	高齢者への対応ができる。	0.287	0.019	-0.048	0.073
32	敬意を払う。	0.252	-0.036	0.042	0.158
33	洞察力を持つ。	0.128	-0.054	0.013	-0.036
34	観察力がある。	0.093	0.052	0.006	0.075
35	教養を持つ。	0.038	0.050	0.078	-0.144
36	不安を表出しない。	0.020	0.149	-0.010	-0.038
37	不快感を与えない。	0.198	0.023	-0.078	0.058
38	気分のむらをなくす。	0.144	-0.027	0.094	0.036
39	会話を集中する。	0.142	0.067	-0.007	-0.032
40	課題を選ぶ。	0.247	0.131	-0.069	0.019
41	相手の気持ちを言語化する。	0.055	0.012	0.084	0.135
42	五感を使って話す。	0.104	0.171	0.052	-0.030
	累積寄与率	29.82	35.46	39.79	43.67

第 1 因子から第 9 因子までの因子分析の結果を表 1-1, 表 1-2 に示した。

表 1-2 因子分析結果

項目No	5	6	7	8	9	
1	0.120	-0.134	0.006	0.123	-0.037	
2	-0.086	0.008	0.173	0.075	0.027	
3	0.066	0.170	-0.059	0.129	-0.015	
4	0.097	-0.045	0.148	-0.023	-0.195	
5	-0.062	0.124	0.040	-0.061	0.089	
6	0.090	0.152	0.104	0.079	-0.043	
7	-0.068	0.067	-0.131	-0.123	0.015	
8	-0.165	-0.037	0.017	0.299	0.122	
9	-0.035	0.175	0.003	0.029	-0.085	
10	0.278	0.155	-0.028	-0.004	0.052	
11	-0.089	0.211	0.017	0.193	-0.013	
12	0.055	0.146	0.233	-0.164	0.211	
13	-0.006	0.010	-0.055	0.007	-0.209	
14	0.031	-0.163	0.007	0.165	-0.133	
15	0.036	-0.070	-0.019	0.068	0.230	
16	-0.158	0.014	0.184	-0.142	0.092	
17	-0.044	0.085	0.128	0.016	0.402	
18	-0.058	0.151	-0.046	0.031	0.207	
19	0.038	0.087	-0.028	-0.104	-0.107	
20	-0.031	-0.034	0.026	-0.005	0.075	
21	-0.102	-0.011	0.008	-0.028	0.210	
22	0.064	0.010	-0.037	0.344	0.029	
23	0.013	-0.029	0.015	0.122	0.376	
24	-0.017	0.015	0.090	0.074	-0.076	
25	0.064	-0.092	0.028	-0.005	0.075	
26	0.022	0.052	-0.129	-0.002	0.111	
27	-0.007	-0.011	0.083	-0.193	0.045	
28	0.068	0.191	0.021	0.043	0.096	
29	0.741	0.114	-0.058	0.012	0.034	
30	0.648	0.193	0.199	0.021	-0.008	
31	0.557	-0.011	-0.033	-0.180	0.112	
32	0.479	-0.273	0.013	0.058	0.053	
33	0.162	0.752	-0.088	-0.062	0.047	
34	-0.037	0.619	-0.135	0.012	0.000	
35	0.161	0.325	0.189	0.146	-0.053	
36	0.077	-0.092	0.674	0.027	-0.034	
37	-0.050	0.084	0.599	0.129	-0.053	
38	0.026	-0.265	0.486	-0.034	0.145	
39	-0.021	-0.015	0.084	0.613	-0.032	
40	0.004	0.014	-0.056	0.382	0.152	
41	0.064	0.020	-0.001	-0.035	0.505	
42	0.155	-0.029	-0.112	0.149	0.309	
	累積寄与率	47.07	50.21	53.26	56.01	58.62

(4) 学年別にみたコミュニケーション能力評価 (図 1 ~ 図 9)

① 学年別にみたコミュニケーションスキル
【積極的傾聴】: 4 学年が 2 学年, 3 学年よりも有意に高い値を示した (図 1)。

② 学年別にみたコミュニケーションスキル
【アサーション】: 学年間には有意な差は認

めなかった (図2)。

③学年別にみたコミュニケーションスキル【音響学的配慮】: 図3に示すように、4学年は2学年、3学年よりも有意に高い値を示した。

④学年別にみたコミュニケーションスキル【係わり】: 図4に示すように係わりのスキルは、4学年は2学年、3学年よりも有意に高い値を示した。

⑤学年別にみたコミュニケーションスキル【人間尊重】: 4学年は2学年よりも有意に高値を示した (図5)。

⑥学年別にみたコミュニケーションスキル【観察】: 図6に示すように、1学年が3学年よりも高い値を示した。

⑦ 学年別にみたコミュニケーションスキル【感情コントロール】: 図7に示すように4学年が3学年よりも高い値を示した。

⑧ 学年別にみたコミュニケーションスキル【フォーカシング】: 4学年は有意に3学年よりも高い値を示した (図8)。

⑨学年別にみたコミュニケーションスキル【言語化】: 学年別に有意差はなかった。

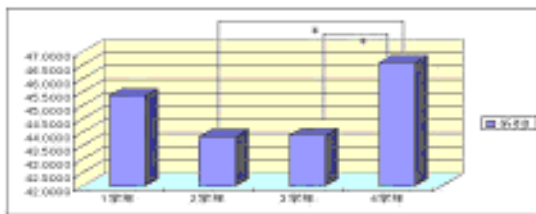


図1 学年別にみた【積極的傾聴】の能力
一元配置分散分析 $F=5.465(p=0.016)$
2学年と4学年、3学年と4学年に有意差あり。

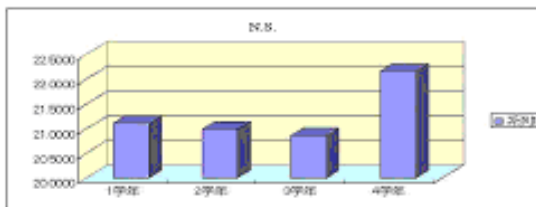


図2 学年別にみたアサーションの能力

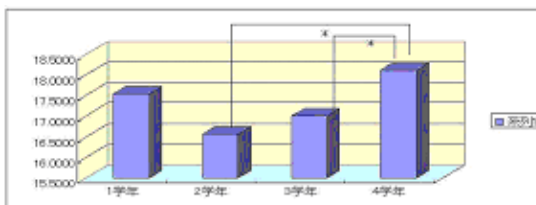


図3 学年別にみた音響学的配慮の能力
一元配置分散分析 $F=2.850(p=0.037)$
2学年と4学年、3学年と4学年に有意差あり。

(5)授業実施後のコミュニケーションスキルの理解度
講義形式、ビデオ形式、ロールプレイ形式に

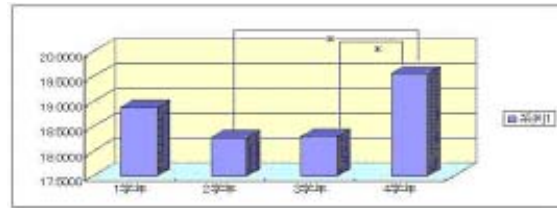


図4 学年別にみた係わりの能力
一元配置分散分析 $F=2.850(p=0.037)$
2学年と4学年、3学年と4学年に有意差あり。

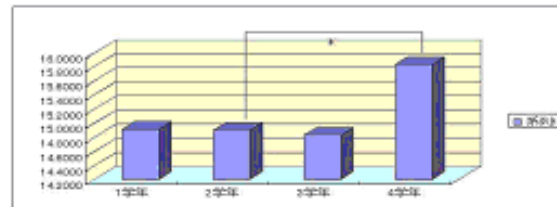


図5 学年別にみた人間尊重の能力
一元配置分散分析 $F=2.850(p=0.037)$
2学年と4学年に有意差あり。

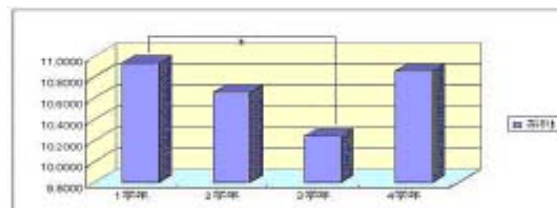


図6 学年別にみた観察の能力
一元配置分散分析 $F=2.850(p=0.037)$
2学年と4学年に有意差あり。

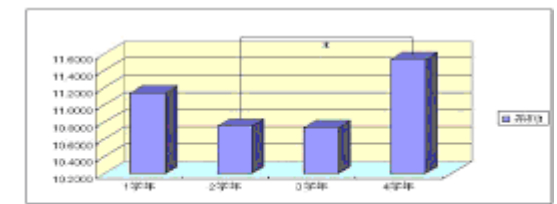


図7 学年別にみた感情コントロールの能力
一元配置分散分析 $F=2.850(p=0.037)$
2学年と4学年に有意差あり。

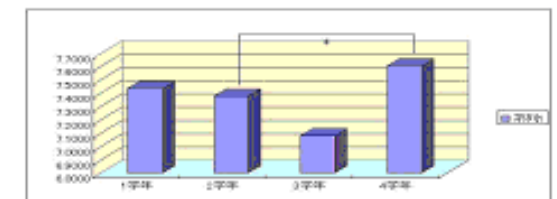


図8 学年別にみたフォーカシングの能力
一元配置分散分析 $F=2.548(p=0.058)$ 、3学年と4学年に有意差あり。

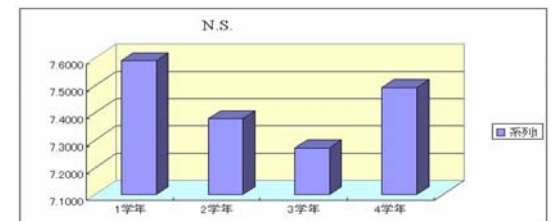


図9 学年別にみた言語化の能力
一元配置分散分析 $F=0.845(p=0.470)$ NS

よる看護学生のコミュニケーションスキルの授業の理解度について評価したところ、実施後は実施前に比較して全体的に有意に高

値を示した。図 10 には、ロールプレイ実施前後の観察のスキルの理解度を示した。実施前よりも実施後の理解度は有意に高い値を示した。

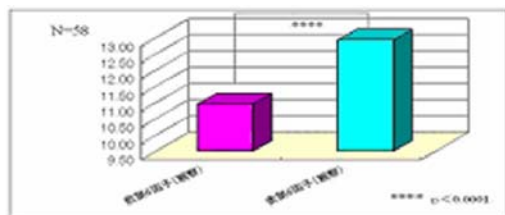


図10 ロールプレイ実施前と実施後の第6因子【観察】の理解度
ロールプレイ実施後の【観察】スキル得点は、実施前に比較して有意に高い値を示した ($p < 0.0001$)。

(6) 学年別にみた授業形態の理解度

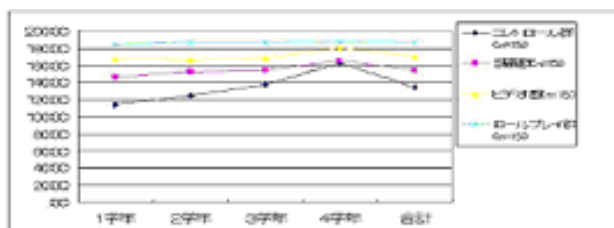


図11 学年別にみた授業形態の違いによるコミュニケーションスキルの理解度 (小グループ)

学年別にみた授業形態の違いによるコミュニケーションスキルの理解では、学年別の比較では、ロールプレイ > ビデオ > 講義の順に理解度が高かった (図 11)。

(7) 小グループによる授業

本方法は、5～6人の小グループで授業を実施する方法である。医学教育では、チュートリアルという方法があり、この場合は、少人数のグループが基本単位となる。授業カリキュラムの中で、実際に5～6人の授業を実施することは、マンパワー不足で授業の実施は困難ではあるが、例えば60名のクラスを6人ずつの小グループを作り授業を実施することは可能である。本方法では学生同志のグループダイナミクスにも効果が検証できる。

(8) 効果的な授業のプログラム

① 授業形式

授業形式としては、パワーポイントや資料を見ながらの講義形式、ビデオを利用した講義形式、ロールプレイなどの演習を入れた講義形式があるが、本研究結果からは、講義形式よりも、ビデオ形式、ビデオ形式よりもロールプレイの方が授業の理解度がよいという結果を得た。本研究結果から考える理想的な「コミュニケーション」に関する授業形式は、講義形式の中に、ビデオやロールプレイを入れながら授業を実施するのが、理想的な授業になると推察する。また、小グループ

によるグループ演習も効果的と考える。

② 授業プログラムの開発

通常授業 90 分における効果的な授業プログラムは以下の通りである。講義 (板書あるいはパワーポイント) [20 分] → ビデオ [15 分] → ロールプレイ [20 分] → 小グループでの討議 [30 分] → まとめ [5 分] と進める。

③ 効果的なコミュニケーション授業のカリキュラム

以上の研究結果から、学識者とこれらの研究結果を精緻に検証した結果、1 学年では『人間尊重』、『積極的傾聴』、2 学年では『積極的傾聴』、『観察』、3 学年で『アサーション』、『感情コントロール』、4 学年では、『音響学的配慮』、『係わり』、『フォーカシング』が有効ではないかと考えられた。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 2 件)

① 上野栄一、長谷川智子、上原佳子、上木礼子、佐々木百恵、吉田華奈恵：看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度の因子構造、日本看護研究学会第 22 回近畿・北陸地方会学術集会、2009, 3, 15.

② 上野栄一、長谷川智子、上原佳子、上木礼子、佐々木百恵、一ノ山隆司：看護師の捉える看護学生のコミュニケーションスキル、日本健康心理学会第 21 回大会、町田、2008, 9, 13.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上野 栄一 (UENO EIICHI)
福井大学・医学部・教授
研究者番号：60262507

(2) 研究分担者

長谷川 智子 (HASEGAWA TOMOKO)
福井大学・医学部・教授
研究者番号：60303369
上原 佳子 (UEHARA YOSHIKO)
福井大学・医学部・講師
研究者番号：50297404
上木 礼子 (UEKI REIKO)
福井大学・医学部・助教
研究者番号：80401959
佐々木 百恵 (SASAKI MOMOE)
福井大学・医学部・助教
研究者番号：00422668